

研究員の研究概要(平成3～4年度)

研 究 題 目	研 究 員
アジアにおける文化交流の研究 <日中・日朝関係の研究>(歴史研究班) 『令集解』所引漢籍の研究 〃 出土史料による中国史の研究 〃 〃 〃 〃 〃 近世対外関係史 対馬宗家文書による日朝関係の研究 来船清人の絵画	(幹事)藤 善 真 澄 奥 村 郁 三 長 谷 川 雅 樹 大 庭 脩 藤 善 真 澄 上 島 紳 一 山 宮 下 三 郎 山 田 幸 一 山 本 清 香 泉 澄 一 山 岡 泰 造
<近世・近代日本における中国語>(言語研究班) 江戸時代の唐話学 「外国資料」としての官話テキスト 『官話指南』漢口語版の可能性について いわゆる「官話」について	(幹事)日 下 恒 夫 井 上 泰 山 日 下 恒 夫 尾 崎 恒 夫 内 田 慶 市
東西文化交流の研究 <文学・神秘主義の比較研究>(比較研究班) 比較文学研究 W. B. Yeats 研究 Julien Green 研究 Ezra Pound 研究 アイルランド文学の研究 —Oliver Goldsmith— <i>The Ancrene Riwe</i> に見られる写本の流布と知識の伝播について 神秘主義の研究 大乘起信論とインド大乘仏教 大乘起信論と日本仏教 大乘起信論と西洋形而上学 大乘起信論と禅仏教 チベットにおける如来蔵思想の思想的展開	(幹事)安 川 昱 名 取 栄 史 前 原 昌 仁 安 川 昱 武 坂 本 武 子 D. イ ー ガ 和 田 葉 子 丹 治 昭 義 薗 田 香 融 川 崎 幸 夫 井 上 克 人 白 館 戒 雲
<東西文化交渉史の研究>(文化交渉史研究班) 対外イメージの比較研究 孫文における西欧と日本 近代ヨーロッパの中国観 技術伝播の研究 水車・風車の技術伝播とその定着過程について 地図作成史の比較研究 紡織機械(器械)の調査研究	(幹事)末 尾 至 行 河 田 悌 一 芝 井 敬 司 末 尾 至 行 矢 守 一 彦 角 山 幸 洋

アジアにおける文化交流の研究

〈日中・日朝関係の研究〉(歴史研究班)

『令集解』所引漢籍の研究

奥村郁三・長谷川雅樹

既にこの研究の主旨については明かにしているように、日本古代のこの類稀な文献の真価を認識するには、テキストを十分に読める状態にしなければならない。従来もいくつかの研究は存しているが、そのネックの一つは引用漢籍をめぐる問題にある。困難を承知でとりかかったわけであるが、多くの協力者を得ることができ、現在は出版に向けての原稿のとりまとめにかかっている所である。引用漢籍の原典の摘出作業、その解説作業、『集解』引用の状態の評価等が中心の柱である。一方多くの協力者と会読を進めると共に、なお集解そのものへの理解を深めながら進行させている。

出土史料による中国史の研究

大庭 脩

研究経過

通常研究 毎週金曜日夕刻に定例研究会(約2時間半)を開催し、漢簡積文を輪読、文意の検討、積文の検討を行なった。本年度中に『居延新簡』の大部分及び「敦煌馬圈湾漢簡」を『敦煌漢簡』の図版にもとづき取扱った。

この研究会には、何双全、趙建民、吳宗国の各氏が滞日中出席した。

国際シンポジウム 12月12・13・14日の3日間関西大学国際交流助成基金、大和銀行アジア・オセアニア財団及び文部省科学研究費(国際学術研究)の援助により、国際シンポジウムを開催、12・13日は公開研究発表、14日は非公開討論会を行なった。その詳細なプロシーディングスは来年度に出版する。

出土史料による中国史の研究

藤善 真澄

出土文物による研究は木簡のほか金石資料の研究があり、藤善はもっぱら金石文研究に力を注いできた。金石資料は近年、敦煌文書に比肩する大規模な

蒐集公刊があいついでおり、従来知られている石刻資料のほか台湾、中国の旧蔵を出版する事業に加えて、中国からは新出資料が大量に紹介されている。それらは『文物』『考古』等によって発表紹介されるものの恣意に公表されるため、整理分類する必要がある、主として造象銘・墓誌銘を整理し現在も続行中である。

研究成果としては『教学研究紀要』1号に掲載した「曇鸞大師生卒年新考」(平成4年3月)がある。わが国の浄土教に直結する中国浄土教の祖師として注目される山西省交城県の石壁玄中寺(現在は永寧禅寺)曇鸞については、これまで幾多の研究がなされてきた。今、寺中に残る唐長慶3年(823)の「特賜寺莊山林地土四至記碑」および開元29年(741)の「石壁寺鐵彌勒像頌并序」によって石壁寺の創建問題が追求され、また羅振玉の拓本「敬造太子造像銘」をもとに曇鸞の生卒年を決定し道宣撰『唐商僧傳』の説を誤りとされてきた。しかし「敬造太子造像銘」の所在を探ることによって玄中寺・曇鸞とは全く無縁のものであることを証明し、玄中寺の創建問題にも新たな見解を発表することができた。現在執筆中のものは造像銘により山西地域における北朝時代の仏教と共同体のありようを究明するものであり、この関係を通じて地方行政さらには文化や民衆の生活がいかなるものであったかを浮彫りにしようとするものである。

出土史料による中国史の研究

上島 紳一

本研究では、木簡画像データベースの開発の一環として、システムの知識化に関する研究を進めている。本システムは、DBMSの機能だけでなく、専門家の行う様々な研究作業を支援することを意図している。

当該年度は、まず、専門家の行う研究作業を分析し、その作業工程に計算機を有効に組み込む為のシステムモデルを作成した。次に、システムモデルを効率的に実装する為、システムソフトウェアの構造として機能的階層を定義した。本モデルは、木簡画像データベースの枠組みを、人文系、自然系を問わず、多くの分野に適用できる資料復元研究支援デー

データベースシステムを対象としている。

(A) システムモデルの概略

専門家の作業形態をモデルに、本システムのオブジェクト指向システムモデルを構築した。システムモデルは、断片化した資料の整理、分類、復元の過程で行われる作業を支援する環境を与えることを目的としている。利用者は、システムに登録されたデータと、作業の過程で生成されるデータを有効に利用して資料の復元作業を進めることができる。

(B) システムソフトウェア構造の概略

階層は5層からなり、データクラス層とオペレーションクラス層の2種類の層からなる。ソフトウェア階層は5層からなり、データクラス層とオペレーションクラス層の2種類の層からなる。データクラス層では、資料オブジェクト、キーワードオブジェクト、仮オブジェクトなどを扱う第1層と、第1層のオブジェクトや索引オブジェクトのリスト、ヒストリオブジェクトなどを持つ第2層、更に、第2層のオブジェクトの操作を行うマネージャーを定義した第3層から構成される。一方、オペレーションクラスは、第4、5層にあたり、ツールクラスとアルゴリズムクラスからなるメソッドの集合である。

上記モデルとソフトウェア階層モデルに基づき、計算機システムの基本設計を行い、システムの実現に向けての課題を検討した。

出土史料による中国史の研究

宮下 三郎

1991年度の関西大学在外研究員に選ばれたのを機会に、中医研究院（北京）の助力を得て中国各地の出土資料を見学し、資料や情報の集収に努めた。4月の研究例会で概略を報告し、その一部を所報に寄稿した。現在資料を整理中である。

近世対外関係史

対馬宗家文書による日朝関係の研究

泉 澄一

平成3～4年度は「雨森芳洲の伝記」執筆にむけ基礎的作業にとり組んだ。平成2年（1990）五月、来日の韓国・盧泰愚大統領が宮中晩餐会の挨拶でそ

の功績を称えたこともあって近年、雨森芳洲に対する世人の関心が高まっている。前後して芳洲の、とくに朝鮮外交における功績を力説する関連の著書も出版され、2、3の論考も見られた。だが、それらの著書や論考が叙述の根拠としたのは芳洲自身が著わした外交論や藩政論、あるいは漢詩文など（ほとんどが本研究所資料集刊『雨森芳洲全書』に収録されている）であって、芳洲が勤仕した対馬藩の藩政記録すなわち「宗家文書」に依拠したものはまったくない。芳洲の著作も貴重な史料にはちがいないが、朝鮮外交はじめ芳洲の業績のすべては対馬藩儒としてのものゆえ「宗家文書」に芳洲の足跡を求めるのが第1であろう。しかし「宗家文書」は多種多量に加え現在は5か所に分散していて、しかも中心的な対馬・宗家文庫の史料が近年まで未整理の状態にあり、その全容を知ることはむずかしかった。私が長年「芳洲の伝記」に関するテーマを掲げながら十分な成果を出し得なかった主因はそれに尽きる。なおそのために藩政の仕組みが理解できず芳洲の地位や立場を把握できなかったことも一因となった。

私は15年（昭和50～平成2年）に及ぶ宗家文庫での整理事業に加え韓国国史編纂委員会所蔵の「宗家文書」（日記・記録類6592冊）の目録作成にも参加したことで、各種の日記や記録類について理解を深め、なおそのことによってようやく藩の人事組織や行政機構をも察知できるようになってきた。かくて大量、多種の「宗家文書」から芳洲に関する史料を効果的に収集するため平成3～4年はまずつぎの史料を中心に調査することにきめた。

「宗家文書」のうち藩政を知り得るもっとも根本的な記録は対馬藩庁の「表書札方毎日記」である。同毎日記には藩庁から人事、行政の各部局（組頭方、朝鮮方あるいは御郡奉行所、御船奉行所など）への通達、人事関係記録、藩内の重要事項等を記録に留めている。やはりこの日記が対馬藩へ勤仕（元禄2年）後の芳洲を知るには第一の記録で、今回は芳洲が参判使都船主としてはじめて渡釜する元禄15年まで、関係史料の収集を図った。そのほか韓国国史編纂委員会所蔵の「朝鮮方毎日記」や「訳官記録（宗家の慶弔に際し朝鮮から派遣されてくる問慰の訳官に関する対馬側の記録）」からも史料を収集した。

芳洲は勤仕後、元禄6年まで江戸、長崎で勉学を

つづけたがその間の記録は乏しい。長崎遊学中、訳官渡来のため2度対馬へ渡るが訳官一行との交渉はほとんど記録されていない。芳洲といえば最初から朝鮮外交のスペシャリストのようにみなされているが事実はまったく異なっている。2度目の対馬行のとき芳洲は小川新平（馬廻格の藩士）の妹（俗名不評）と結婚するが小川家の家系についても「奉公帳」によっておおよそ判明した。なお義兄となる小川新平と芳洲は元禄7年、藩主の参勤に際し江戸行をともにしていることもわかった。元禄11年から芳洲は対馬に居住し藩儒として勤めるが、朝鮮への貿易銀にかかわって家老が勤める「朝鮮御用支配役」の佐役を命じられる。いわば支配役のブレンンなのだがこれまで「朝鮮方頭役」の佐役と誤解され、芳洲がこの佐役就任によって朝鮮外交に腕を振ったように思われていた。このように「宗家文書」の調査から従来の諸説と異なる知見を得ているが、その成果（拙稿「元禄2～15年、対馬藩に勤役中の雨森芳洲について」）は『国史館論叢』（韓国国史編纂委員会、1993年5月刊行予定）に掲載されることになっている。

〈近世・近代日本における中国語〉（言語研究班）

江戸時代の唐話学

井上 泰山

昨年度の研究例会において、「遠山荷塘と唐話学」と題して研究報告を行ない、江戸期の唐話学者としては特筆すべき業績を残した遠山荷塘の足跡と俗文学関係の資料について考えたが、その際、所員の方々から賜った有益な教示に基づき、荷塘その人についての事蹟を更に細かく追ひ、又、残された唐話学関係の資料を新たに若干補うことができた。それらを総合することによって、今年度の主要研究目的であったところの、江戸期唐話学史上に占める荷塘の位置付けに関し、ある程度考えをまとめることができた。また、近年発見された、「金瓶梅」訓点付注本（鹿児島大学付属図書館玉里文庫蔵）について、それが他ならぬ遠山荷塘自身の意見を随所に存する重要な資料であるため、既にマイクロ資料を取りよせ、嘗て検討を進めつつある。荷塘の事蹟についてはなお不明な部分も多く、今後の研究に俟つところ

が大きい。今年度は特に、私塾での荷塘の修学状況について調査し、その学問的系譜の一端を知る手がかりを得た。

「外国資料」としての官話テキスト

日下 恒夫

中国語における外国資料については資料の収集と目録編集などを行うが、なお継続中。

老舎研究では1991年3月に研究団を結成し副団長として訪中、北京にて数回の座談会に参加。「1991年春、北京——祥子の道と老舎の原風景——」（老舎研究会会報第11号）参照。1992年8月、北京語言学院（大学）にて開催された第1回国際老舎シンポジウム（1989年に開催予定、天安門事件のため延期）に参加、全体会議の司会担当、また「近十年来日本老舎研究簡介」と題して発表。文献目録（『日本における老舎関係文献目録』以降の文献目録）を配付、現在両目録をあわせて改訂増補作業を継続中。シンポジウムでロシア研究者との意見交換を期待していたが、経済的理由により不参加であった。日本国内の老舎研究会を毎年主催。なお、「老舎と北京——あるいは老舎の北京——」（しにか、1992年3月号）発表。その一端をふくめ泊園記念講座で講演。満洲文学に関連したものでは『素朴主義』と文学の読み方（宮崎市定全集月報第11号、1992年）。

言語方面では主として上海方言文法の記述研究および共通語の基礎語彙研究を継続中、なお数年を要する予定。「現代上海語の実用ローマ字表記法について——検討と提案——」（関西大学文学論集40—4、1991年）、「上海語ならいぞめ」（トンシュエ第3号、1992年）、「上海語の〈生髮油買來売去〉から——音声・表記・言葉遊びノート——」（関西大学中国文学会紀要第13号、1992年）などを発表。

『官話指南』漢口語版の可能性について

尾崎 實

1：研究例会と『所報』

1）平成4年1月20日の研究例会で「パンと中国人」というテーマで報告し、その概要は『所報』第55号に掲載された。

2) 平成4年7月22日の研究例会で『紅樓夢』の中の舶来品——時計の場合——というテーマで報告した。その概要は所報第56号に掲載された。

2: 泊園記念講座と『泊園』

平成3年11月14日の講演録——テーマは「近代中国における時間の表わしかた」——は平成4年9月20日刊の『泊園』第31号に収められた。

いわゆる「官話」について

内田 慶市

「官話」ということを中心に、今研究年度においては次のような研究活動を行ってきた。

〈研究論文〉

1. 《華語拼音妙法》の音系——「南京官話」の一資料

(『中文研究集刊』3号 平成3年10月)
《華語拼音妙法》という20世紀初めの欧米人の手による中国語教本をとりあげ、いわゆる当時の「官話」というものが実は「南京官話」を中心としたのではないかということについて、「正音」とは何かということも考えながら論じた。「南京官話」に関する資料は乏しいが本資料は当時の「南京官話」をしる上では貴重なものであり、本稿によって、ある程度その「音系」については明らかになったと思われる。

2. 「官話」研究における「漢訳聖書」の位置付け

(『関西大学文学論集』第41巻第3号 平成4年2月)
「官話」研究において、欧米人の官話資料の重要性はこれまでから言われてきたが、特に「漢訳聖書」のその中における位置について述べ、あわせて「官話」研究(とりわけ南京官話)の方法のあり方についても論じた。何をもち、北京語あるいは南京語とするかということについて排除法でなく、決め手となる何等かの「鑑定語」の抽出の必要性について論じたものであるが、その場合、「漢訳聖書」が浮かび上がってくると考えるものである。

3. 《滬語指南》的“拉”“之”“哉”以及“啫”
(『関西大学中国文学会紀要』第13号 平成4年3月)

「官話」資料の一つである『官話指南』の上海語訳である《滬語指南》について、特にそこにみられるいくつかの「語助詞」について、「官話」との対照を行いながら、その特長を探った。「官話」とは何かを言う場合単に「官話」だけを見るのではなく、「方言」との対照を行うことの重要性を考えて論じたものである。

〈口頭発表〉

1. 《華語拼音妙法》について

第6回中国近世語研究会 大東文化会館
平成3年5月26日

2. 「漢訳聖書」について——官話研究の方法をめぐって

第3回中国近世語研究会秋季研究集会 大東文化会館
平成3年12月8日

3. 「漢訳聖書」のことなど——その可能性

関西大学東西学術研究所研究例会 平成4年8月22日

東西文化交流の研究

〈文学・神秘主義の比較研究〉(比較研究班)
比較文学研究

Ezra Pound 研究

安川 昱

今期は、平成3年6・7月の2ヶ月間、世界的に有名な批評家であり、とりわけ Ezra Pound の発掘者であり(*The Poetry of Ezra Pound*, 1951)、今なお指導的な Pound の研究家である Hugh Kenner 博士(*The Pound Era*, 1971)を、本学の平成3年度招聘教授として文学部に招聘するという、重要かつ記念すべき出来事があったので(世話人: 安川昱と Peter Makin)、今期前半の Pound 研究は、Hugh Kenner 博士の仕事を中心に、Pound 研究史を振り返り、また日本と Pound の関連、日本の Pound 学者の仕事を再検討して Hugh Kenner 博士との共同研究や討論に備えた。

Hugh Kenner 博士の本学に於ける公式の講演は

次の2回であった。

6月21日(金)。文学部講演会(10.40~12.10。AV-B教室。司会:安川 昱)演題:“What Criticism is for”。

7月19日(金)。英文学会講演会(15.00~16.00。英文合研。司会:坂本 武)演題:“Meeting with Great Men”。

また、7月22日(月)には、Peter Makin 教授との対談が非公開で行われた。この時の対談はMakin 教授によって採録され、“An Interview with Hugh Kenner”という表題のもとに『英文学論集』第31号(December 1991)に掲載されている。

同年6月10日(月)には、必ずしも Pound の影響の濃厚な詩人ではないが、英国の詩人で批評家の Jon Silkin 氏を招いて、“Contemporary British Poetry”と題する講演をしていただいた(平成3年度 LL 特別講義。14:40~16:10。AV-B 教室。司会:安川 昱)。

後半は、平成4年度交換派遣研究者として9・10月の2ヶ月間滞在した中国の遼寧大学で、外語系の教授であり、遼寧大学比較文化研究所所長の范岳教授と「Pound と東洋文化」というテーマのもとで共同研究を行った。そして、外語系の院生のために“Ezra Pound and Japanese Culture”と題する講義をした。また、徐葆耕教授の招きで訪問した北京清華大学では“Ezra Pound and Chinese Culture”という演題で特別講義を行った。中国滞在中、Pound 自身は遂に訪ねることができなかったが、Pound にとって特別な意味をもつ聖なる山泰山に登り、曲阜に赴いては孔廟、孔府を訪ね、孔林の孔子の墓に詣でた。

アイルランド文学の研究

—Oliver Goldsmith—

坂本 武

Oliver Goldsmith の作品において Sentimentalism は二つの様相をみせる。通常の Sentimentalism とそれに反する Anti-sentimentalism である。本研究は主に後者の様相を明らかにするものであるが、今研究年度は、標記のテーマに関連する Goldsmith の essays を中心に調査した。

今回、調査対象とした作品は次の通りである。

- 1) “A True History for the Ladies” (*The British Magazine*, July 1760)
- 2) “The History of Miss Stanton” (*The British Magazine*, July 1760)
- 3) Letter LIX—“From Hingpo to Lien Chi Altangi, by the way to Moscow” (*The Citizen of the World*)
- 4) “A Resverie” (*The Bee*, No. V, 1759)
- 5) “Upon Unfortunate Merit” (*The Bee*, No. V, 1759)
- 6) “The Revolution of Low Life” (*The Lloyd's Evening Post*, June 1762)

これらのエッセイの特徴は、物語性に富んでいるということであり、従って小説的要素が含まれていることである。そこにおいて主張される教訓性がつまり本研究の主題に係わると考えられるのである。

Goldsmith の Anti-Sentimentalism のイメージは、これらの作品によってある程度定義が可能と思われるが、調査の途中でさらに検討すべき資料が出てきている段階であるので、今しばらく調査を継続したい。

The Ancrene Riwe に見られる写本の流布と知識の伝播について

和田 葉子

Ancrene Riwe のテキスト編纂のため、前回ケンブリッジ大学コーパス・クリスティ・コレッジのパーカー図書館、モードリン・コレッジのピープス図書館、ゴンヴィル・アンド・キース・コレッジの図書館で行った筆写を再検討した。引き続き、関西大学の休暇時には、イギリスで調査した。主に、ケンブリッジを中心に、大英図書館の写本室、オックスフォードのボードリアン図書館にある *Ancrene Riwe* の写本を校訂のため、利用し、さらに、作品の受容の違いについて、他の英語で書かれた宗教本と、比較するため、中英語の写本の中で最も多く(115)現存している *the Prick of Conscience* の写本を、同じく、ケンブリッジ・ロンドン・オックスフォードで調査した。

委嘱研究員となった1992年4月よりは、ケンブリ

ッジ大学ドクター・コースのリサーチ・スチューデントとしての研究を続けながら、*Ancrene Riwele* のテキスト編纂のため、ケンブリッジ・コンピューター・ラボラトリーで、テキストをコンピューターに入力、そこから、このラボラトリーにあるプログラムを使って、ヴォキャブラリー・リストとワード・インデックスを作った。現代英語にない文字の読み取りやソートに一番悩まされた。特に、語学系のコンピューターの専門家を集めたリングウォスティック・アンド・リテラリー・コンピューティング・センターのアドヴァイザーの人々には、その時以来、今もずっと、お世話になっている。サザンプトン大学のベラ・ミレット博士との *Ancrene Riwele* に関する共同研究も進行中である。

1992年3月に発行された『東西学術研究所紀要』25号には「チャーサーを愛した古英語写本のコレクター達——16～18世紀における『カンタベリー物語』写本の意義」を掲載した。

神秘主義の研究

大乘起信論とインド大乘仏教

丹治昭義・白館戒雲

大乘起信論研究班では、平成3年12月に研究員の研究発表と討議のために合宿を行なった。6日の午前11時から23時まで研究協力者の吾妻重二助教授が言語学面からの研究発表、晩は研究員の白館戒雲講師がチベット仏教における如来蔵思想の発表を行った。翌7日の午前中には研究員の井上克人助教授が『起信論』と禅、研究協力者の山本幾生講師が仏性とベルグソンの哲学に関する研究発表を行なった。

本年度の研究を総括する意味で、平成5年1月28日～29日に合宿を行なった。28日午後は川崎研究員が約四時間に亘って「帰敬偈」と「因縁分」に関して、『義記』と『裂網記』の二注釈書を駆使して綿密で徹底した研究発表を行なった。晩は丹治が「立義分」を中心に「義記」の解釈と『起信論』の本分との若干のずれについて発表した。翌日29日は午前9時から12時半まで菌田研究員が最澄に関する諸文献を渉猟されて、平安期までの吾が国における『起信論』の受容を仔細に跡づけられた。

なお筆者自身は平成3年度に研究叢刊6—2とし

て『実在と認識』を刊行した。

大乘起信論と西洋形而上學

川崎 幸夫

擔當者の課題は『大乘起信論』を西洋神秘主義および西洋の宗教哲學と對比させることをとほして、『大乘起信論』で展開された思想の本質を明かにすることであるが、そのためには『起信論』そのものの理解が必要になる。『起信論』の思想的研究の方法にはさまざまな行き方がありうるが、筆者はまづ『起信論』を印度を含めた佛教史全體と、特に日本、朝鮮、中國における漢譯佛典の圏域の傳統の中に位置づけると同時に、そのことを日本佛教全體への批判的検討に結びつけることの必要性を痛感してゐる。勿論このやうな課題も専門家の間では既に採上げられてきてゐるわけであり、中國佛教に關する龐大な文献を渉獵することが要求され一朝一夕にはならないが、筆者は特に現代日本における宗教哲學の課題といふ視點に立つてこの問題を採上げることにはしたいと思つてゐる。

これについて差當り簡単な見通しを試みたのが「東西研所報」(第55號)に載せた「『大乘起信論』の意義について」といふ報告である。これはもともとは「『起信論』における空と覺」といふ題で平成3年11月20日の研究例会で報告を行つたのに對するレジюмеとなる筈であつたが當時の発表は必ずしも意に充たないものであつた上、問題の大きさからいつて尙一層周到な用意を重ねたのちに論議を展開した方がよいと思はれたので、この點についての報告は他日を期することにしたい。

さて『起信論』の思想的内容に關する研究の第1陣として平成5年1月に書上げたのが「『大乘起信論』——造論の因縁」といふ論文であり、これは東西研の紀要に載つてゐる。『起信論』は「序分」、「正宗分」、「流通分」と三つに分れ、更に本論にあたる「正宗分」は5つに分けられてゐる。今回の論文は「序分」と「正宗分」の内の「第一因縁分」とを取上げ、『起信論』の論書としての根本性格を検討した。今後も引續いて「第二立義分」以下における中心的問題を採上げることにしてゐる。

今回の論文は『起信論』の新舊兩譯テキストのは

か法藏の『義記』と智旭の『裂網疏』および大拙による英譯を採上げて考察した。今までこれだけの範圍にわたって研究が行はれたことはないと思はれ、この點は筆者としても特色のある研究と言つてもよいやうに思つてゐる。

なほ本年1月28・9日の宿泊セミナーでは筆者も發表を行った。

大乘起信論と禪仏教

井上 克人

大乘仏教の根幹を極めて精密かつ論理的に表明したものと見做される『大乘起信論』はまたそれだけに一層煩瑣で難解な書物であることは誰しも認めるところである。それが印度撰出か中国撰出か、未だ決着がつかない状況であるが、当研究班はその表現様式、文体論的視座からも討議し、検討を重ねてきている。筆者はそれを踏まえながら、その如来藏思想の思惟形式、とくに体・用の論理に着目し、思索をすすめてきた。まずその手懸りとして、中国初期禪宗に於ける本覚思想の受容の変遷を敦煌資料にあたりながら、詳細に検討してきた。そこには例えば日本仏教に於けるかなり日本的に改変された本覚思想とは異なり、その本質的な哲学がほぼそのままのかたちで引証され、解釈されている。しかし『起信論』は禪宗のみに留まらず、華嚴教学、天台教学にも深くかかわり、更には浄土系仏教にもその本質的部分が取り込まれていることも周知のところである。今後は、法藏の『義記』を中心にその他の義疏類をも詳さに繙読しながら研究を押しすすめ、大乘仏教の精髓を究明してみたい。とくに体・用の論理は極めて難解であるためか、誤解に基づく本覚思想批判、大乘仏教批判が横行している現在、慎重に研究していく予定である。

〈東西文化交渉史の研究〉(文化交渉史研究班)

対外イメージの比較研究

孫文における西欧と日本

河田 第一

時代が大きく変わる変革期には、多くの未来を先取りするような思想や思想家が、生まれるものであ

る。封建体制の清朝が崩壊し、アジアで最初の共和国が成立した20世紀初頭の中国は、まさにそのような時代であった。

私はこれまで、そうした20世紀初めの中国における西欧と日本のイメージを、孫文という人物に焦点を絞りつつ解き明かそうとして、いくつかの基礎的な作業をおこなってきた(『孫文選集』第3巻、社会思想社参照)。

ところが、私は1991年3月から1年間、アメリカ東部のプリンストン大学で在外研究をする機会をあたえられた。そこでこれを契機に、問題を孫文のみに限定することなく、2つの方向から中国における西欧と日本について考えてみることにした。1つは、1910年から20年代、中国古典の学問的再検討を提唱した学者の胡適を主題に。もう1つは、天安門事件後アメリカ(プリンストン)に亡命した中国の学者や文学者を主題に。1950年5月から2年間、プリンストン大学ゲスト東亜図書館長をつとめた胡適の日本観の一端は「胡適与日本学人」と題して『関西大学中国文学会紀要』第13号に掲載。また亡命中国人数者の西欧観、日本観についてはいくつかの雑誌、新聞に論考を發表した。が、かれらの思想は、ある意味で中国の未来を先取りしたものとといえるかも知れない。20世紀もあと残すところ7年。中国はどうなるのか――。

近代ヨーロッパの中国観

芝井 敬司

近代ヨーロッパの対外イメージの特質を考える上で、エドワード・W・サイードの『オリエンタリズム』は一つの手がかりを与えてくれる。サイードは、この本の中で、筆者が主として関心を寄せている18世紀について、この時期を、19世紀以降のヨーロッパの対外膨脹を支えるイデオロギーとしての近代的構造を持つ「オリエンタリズム」の準備期と考えている。そして、17世紀と比べた場合、18世紀には、拡大、歴史的対決、共感、分類の4つの要素が現れると述べている。

これを手がかりに、18世紀後半の著名な歴史家エドワード・ギボンと彼の主著『ローマ帝国衰亡史』を分析していくことによって、筆者は、ヨーロッパ

の外部世界についてのイメージが、早くも18世紀の後半の時点で、かなり急速に近代ヨーロッパ社会優位の形へと転換していった状況を確認することができた。とりわけ、『衰亡史』第9章のゲルマン人についての叙述と、第26章の遊牧諸民族についての叙述には、過去の歴史と当時の非ヨーロッパ世界に対するイメージが重ねあわさっており、このような二重構造を、スコットランド啓蒙思想において展開された四段階論が下支えしていた。

他方、従来『衰亡史』全体にとっては異質の部分と考えられてきた第3巻末尾の「西方におけるローマ帝国滅亡に関する一般的考察」については、その成立時期の分析を行い、「一般的考察」が、かなり早い時期に『衰亡史』全体のまとめとして執筆された可能性が高いことを示した。そのことによって、「一般的考察」において示されている近代ヨーロッパ文明の未来に対する楽観論と人類の歩みについての進歩思想は、ギボンズの基本的立場であることが明確になった。

その結果、ヨーロッパの対外イメージにおける近代主義への転換点を、18世紀後半に想定する可能性が開けたと言える。

技術伝播の研究

水車・風車の技術伝播とその定着過程について

末尾 至行

前期に引き続き、明治時代以降、地方庁が関与して保存している「水車設置願出文書類」の閲覧・分析作業を、東京都、石川県、岩手県、宮城県において実施した。宮城県では、明治10年代末期に佐沼町近傍で計画された舟水車に関する文書（図面付）を発見し、現地も探訪してその詳細を明らかにした。また、東京都関係では、福沢諭吉・一太郎父子が明治17年以来所有・経営していた芝区白金村の米搗水車に興味を覚え、福沢研究センター（慶応大学内）にも赴いて補足資料の蒐集に当たった。

他方、海外の水車・風車を対象にしては、文部省科学研究費「国際学術研究」の交付を受けたこともあって、平成3年度は夏2カ月をかけてハンガリー・トルコで、4年度は夏1カ月間をブルガリア・クレタ島（ギリシア）で、調査に当たった。総じて

言えることは、トルコで一般的な水平型水車はその隣接地域ともいべきブルガリア・クレタ島でも一般的である。ただその回転方向は、クレタ島ではトルコ同様の反時計回り、ブルガリアではそのほとんどが時計回りである。水車技術史の上では、水平型水車は、「ローマ式」と呼ばれる垂直型水車との対で「ギリシア式」と名付けられているが、クレタ島の水車はその反時計回りの意を受けて「トルコ式」の名を得ていて面白い。なお、ハンガリーの水車はそのすべてが垂直型水車であるが、それによって動かされる石臼は時計回り回転である。一方、風車はハンガリー平原一帯、ブルガリアの黒海沿岸、クレタ島、トルコのエーゲ海沿岸にみられるが、石臼の回転方向の地域差は水車の場合と完全に一致する。

なお平成4年度には、10月13日から11月27日にかけて、農村文化と農業技術の比較研究のため関西大学招聘研究者として来日していたパラージュ氏（国立ハンガリー農業博物館研究部部長）とともに、河内長野市域に残存する製薬水車、米搗水車について共同研究をする機会をもった。

今期中には、平成3年10月の研究例会において、「Mehter Bandosu（オスマン軍楽隊）考」として研究発表をしたほか、外部でも次のようなテーマで研究成果を口頭発表した。

「舟水車考—特に宮城県登米郡（旧）北方村の事例を中心に—」平成4年5月、歴史地理学会大会、於千葉大学。

「水力開発利用をめぐる地方差について」平成4年5月、歴史地理学会大会シンポジウム「東北日本と西南日本」、於千葉大学。

また、次の論文も公にした。

「近年のトルコにおける水車・風車製粉事情」、『西南アジア研究』、38号、平成5年3月。

紡織具の調査研究

角山 幸洋

「出土「舞羽」について」『紀要』第25号
紡織用具のうち糸枠から整経具に移すための「舞羽」について検討をおこなった。これらは考古学の分野では発掘担当者が見落とししていたものである。そのため『報告書』から木製品を探し出し、実測図

により検討することにした。その結果、明らかになったことは民俗資料とはことなり、整経する経糸の本数が、現在より多いことであった。

「堺緞通—中国緞通技術の受容と輸出地場産業の成立—」『研究叢刊』九

大阪の南部の堺・住吉で明治時代に盛んであった緞通について、その導入過程と、輸出産業主要な役割を占めたことについて、生産と消費の面から詳述しようとしたものである。これらの資料は、いままであまり知られておらず、そのために収集につとめ掲載した。

この資料はこれまで著書・論文で、とりあげられたことはなかったことによる。